

ことばの世界とその魅力

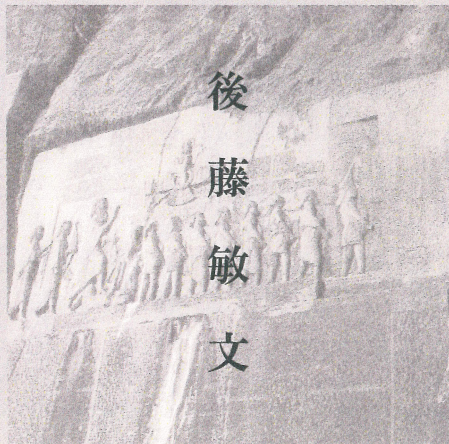
阿子島 香 編

## 目次

はじめに	阿子島 香
1 「あいうえお」の言語学	後藤 斉 1
2 古くて新しい古典文法	大木 一夫 51
3 詩の言葉の魅力	佐藤 伸宏 89
4 インドのことはとヨーロッパのことは	後藤 敏文 117
5 漢字の魅力と魔力―「反切」の成立とその応用	花登 正宏 165
読者の皆様へ	東北大学大学院文学研究科 出版企画委員会

執筆者紹介

インドのことばと  
ヨーロッパのことば



後  
藤  
敏  
文





## 4 インドのことばとヨーロッパのことば

後藤敏文

### 1 インドの言語

インドには多くの言語があるとされます。これには、地方ごとに標準語が定められ、異なる文字が使用されているという事情が反映しています。それらは図1に見られるように、基本的には四ないし五の言語グループにまとめられます。北部、中央部を広く占めるインドアーリア語(Indo-Aryan)系の諸言語、南部インドのタミル、マラーヤラム、カンナダ、テルグに代表されるドラヴィダ(Dravidian)語圏、オリッサ、ベンガルなど東インドの山間部を中心に残るムンダ(Munda)語等のグループ、そして、チベット・ビルマ語系統のグループです。今日お話しすることは、これら現代インドの言語事情についてはなく、インド文化圏形成の中核を担ったインドアーリア語系諸言語の遠い源をたどることです。ヒンディー、マラーティー、グジャラーティー、ラージャスターニーなど、インドの主要言語、さらにスリランカ(スィンハラ語)、バングラデーシュ(ベンガリ)、

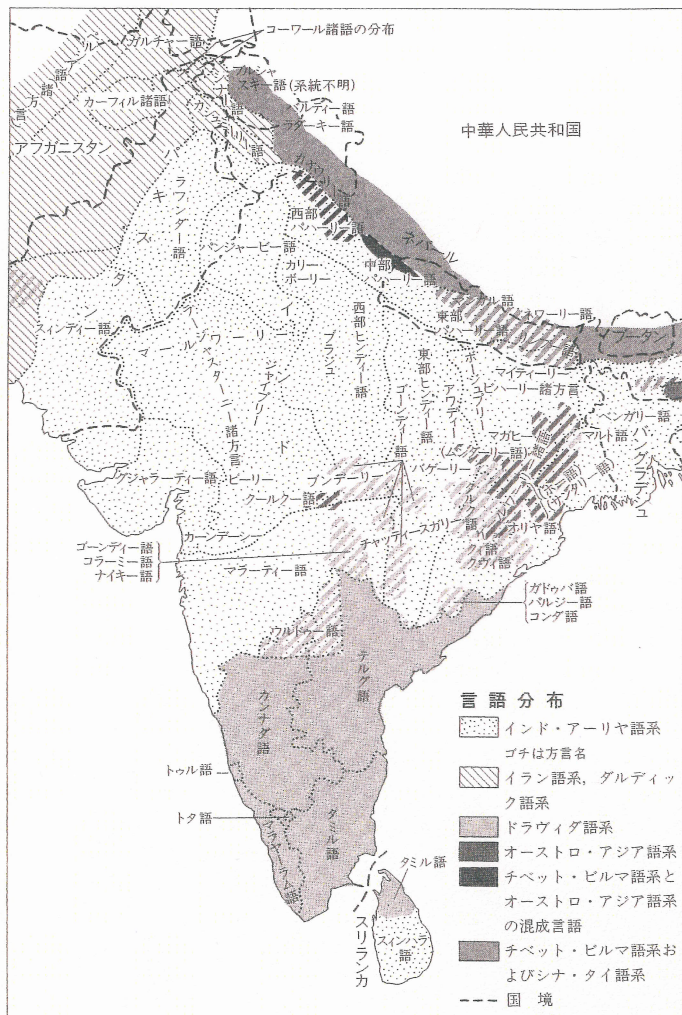


図1 インド言語地図

パキスタンのウルドゥー語等を包摂する「インドアーリヤ」語の歴史的背景に注目してみましよう。そこから現代世界の諸問題に連なる大きな歴史的な流れの一つがあらためて浮かび上がる筈はずです。ことは重要ですが、案外正面から捕らえられることの少ない主題です。

## 二 インド・ヨーロッパ語族

インドアーリヤ語はもともとインド亜大陸で話されていた言語ではなく、西方からこの地に移動してきた人々もたらしたものです。考古学的知見と照合することは未だにできていませんが、「インドアーリヤ人」たちは、およそ紀元前二五〇〇年以降、アフガニスタン付近からカーブル (Kabul) の峠を越え、インダス河上流域に入つて来たものと思われれます。メソポタミアからアフガニスタンへ懸けての西方世界に、彼らを高い山脈を越えて東進させるに至るような大きな変動があったことを想像させますが、具体的中味は不明です。牛、馬、ヤギ、羊の遊牧をしながら部族単位で順次インダス上流に出たものと思われれます。「インダス」という呼称は、歴史学、地理学の中心地であった小アジアのギリシャ語から西欧諸語に入った形です。中国では印度、印土などと音写されました。もともとは、河川名「スィンドゥ」(Sindhu) がイランの言語で「ヒンドゥ」(Hindu) と置き換えられ、更に小アジアのイオニア方言の変化を経た Indos, Indus に遡ります。スィンドゥは中国では

身毒、辛頭、身豆などと、ヒンドウを経た語形は賢豆、賢毒、乾竺などと音写されました。より代表的な「天竺」さらに天毒、天豆などの音写の背景には何らかの方言形があるものと考えられ、ヒンドウまたはスインドウに起源すると考えられます。

この「インドアーリア語」はイランの言語と共通の祖先「インド・イラン祖語」から分かれて発展したものです。さらにこの「インド・イラン語派」はヨーロッパの主要な言語と共通の起源を持っていたことが明らかになっています。図2を見てみましょう。

この図はインド・ヨーロッパ祖語 (印欧祖語 Proto-Indo-European, Urindogermanisch) から各言語が分岐した次第を表示したものです。研究者の中には、アナトリア語派が始めに分岐

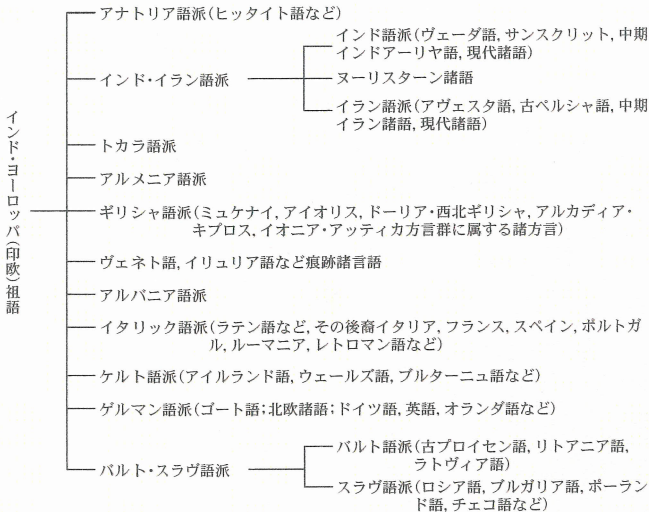


図2 インド・ヨーロッパ語系統図

したとか、イタロ・ケルト語派（イタリック語派とケルト語派に共通段階を想定する場合）と、例えばトカラ語派とが近親関係にあると主張するなど、様々な見方がありますが、多分にその時々のは扱対象に左右されているところがあります。何れの見方を探るにしても、おおよそこに示したような「系統図」を基にしていることには変わりはありません。上にある語派ほど古くからの文献証拠を持ち、下にあるものほど遅れて言語資料が見られるグループというふうに配列されています。ただし、近親関係（または分岐後の地理的近接関係）を示す指標を考慮して、配置に多少の操作が加えられています。

先ず全体に親しむ目的で、何ら学問的には根拠づけられない空想におつき合ひ下さい。一つは、その言語が最盛期になって文献に密度の高い思想が詰まっていたり、重要な文献が出てきたりする直前に、語派内部で大きな分岐が起きているということです。例えば、ギリシャ語派は「ギリシャ語」というものがあるわけではなく、いろいろな方言のグループ名です。最古の資料は紀元前十四世紀まで遡りますが、その後一斉ないしは順次、各地に植民活動によって多くの方言が現れてきます。その後、アテーナイの文化が出て、何十年かの黄金時代が出現しました。世界史という概念がどうして西洋文化に負っているかという点、そのアテーナイの何十年かを我々は今日に至るまで背負っているからという部分は否定できないと思います。地中海の覇権を掌握しておきながら、それ以後ギリシャはそれほど私たちの世界を揺り動かしませんでした。途中トルコに占領されるなど悲



惨な道も歩みました。しかし、その昔、ギリシャ語派の中の、複数の方言が標準語となっていた時代がありました。

この表の中にある多かれ少なかれ標準語化された言語が公用語、文章語として今日まで文献を伝えていきます。文章語ができるということはそれ自身特別なことですが、文章語ができて記録される時代、その後最盛期を迎え、ある語派または言語がいわば当時の「世界史」の集約点とも言える地位に達します。

最初はヒッタイト王国の時代です。その次はインド・イラン語派。インドの『リグヴェーダ』などの文献を読むと、ブッダに至るまでの時期（紀元前一二〇〇年頃から前四世紀頃）は知的集中度の高い時代であったことが伺われます。私たちの頭脳、思考というものが、問題意識の昂揚とその解決を巡る営みを通して、どれほど高度な知力を発揮できるかということを教えてくれる例の一つです。私個人は、インドの人々には叱られるかも知れませんが、それ以後よりも、ヴェーダ期、『リグヴェーダ』とそれに後続する時代の集中度、議論が沸騰してゆく様に興奮を覚えます。ただし、先に述べましたように、現代インドは各地の「方言」が各州の標準語になっているわけですから、この理屈で言うると、次はインドが大きく世界史に登場すると言うことになるかも知れません。しかし、現代インドの場合には移動、拡大、支配といったダイナミズムを背景にしているわけではありません。

インドのことばとヨーロッパのことば

イランに移りますと、ゾロアスターの宗教文献『アヴェエスタ』があります。ゾロアスター教がなければ、ユダヤ教、キリスト教の終末論も違ったものになっていたと言われています。古ペルシャ語はダリウス大王の碑文（図3）から始まるアケメネス朝ペルシャの諸王の碑文に見られる言語です。

次に挙げてある語派はアルメニアですが、ギリシャ語派との関係でここに置かれています。アルメニア人は紀元前六世紀以降現在の地にあつたことが確かめられています。文獻は紀元後五世紀初めに遡るキリスト教関係

の文書などです。今日までアルメニア教会が続いています。それ程歴史を動かしたということはないかと思われます。歴史に動かされたという点では凄まじい迫害の歴史を背負っています。次のギリシャの時代については先に触れました。その次に、ラテン語がローマ帝国の力で当時の彼らの世界を席卷します。ケルト語派は纏まった古い文獻を残していませんが、紀元前の数百年間、中部ヨーロッパに拡がり、地名をはじめ今日まで多くの足跡を残しています。次はゴート語などのゲルマン語派。ドイツ語ではフランク族などが重要ですが、今は英語です。紀元後五世紀くらいからアンゲ



図3 ダリウス大王ビーストゥーン磨崖碑文（紀元前6世紀末）



ル族、ザクセン族、ユート族などが大ブリテン島に移住して「英語」を形成します。これが新大陸に移植され、アメリカ合衆国の言語として現在最強の言語です。

旧ソ連の時代を考えますと、壁が崩れる前には英語まで重点が移ってきたのですから、次はスラヴ語派、おそらくロシアの時代が来て、世界史を染めるのではないかと空想しておりました。ロシア語の小説とか政治以外の力の時代の出現を思っていたのです。良い小説や芸術には社会の抑圧といったものも必要なのか、インド・ヨーロッパ語族の覇権譲渡という点では混迷の段階を迎えているようです。単なる夢想ではありますが、そのように順番に覇権を巡って拡張しているということが、多少見えてくる気がします。

### 三 インド・ヨーロッパ語比較言語学

何故これらの諸言語が一つの共通祖先（インド・ヨーロッパ祖語）から出たものと証明できるかについて、今日は詳しくお話ししません。基本は、「音韻対応」と「音韻変化」にあります。例えば「父」を意味する語は古いインドのことばで *pitar-*（ハイフンはその後に活用語尾がつくことを意味する）、ギリシヤ語では *pater*, ラテン語では *pater*, 英語では *father* です。子音に注目するより *p-p-p-f*, *t-t-t-th*（*θ* または *ð*）とこの対応が見られます。前者の対応は *pāt* 「足が」 *pūs* (*pūs*

と発音) 'pes, foot' の中にも見られ、後者は *bhātar-* 「兄、弟」 *phāter, frāter, brother* にも見られます。アクセントの位置や周りの環境によって個々の言語で様々な展開を示しますので単純な例は少ないのですが、ことばの歴史的变化の基盤を形作るのは音(意味を担う弁別的な音の単位を phonem 「音素、音韻」とよびます)の組織的移行、変化です。どの単語の中の音であるかにかかわらず、ある音 A は長時間の経過の中に B に変化します。分岐して独立の道を辿る過程で、ある言語では、無声の閉鎖音 (*k, t, p* など) が有声音 (*g, d, b* など)、あるいは氣息を伴った音 (*kʰ, tʰ, pʰ*)、あるいは摩擦音 (*x, θ, φ* ないし *h*) に移行するという、発音方法の変化が起こります。発音位置がずれることもあります。言語間の比較によって確認されるこのような対応が「音韻対応」です。

このような対応関係の比較に基づいて、元になった言語「インド・ヨーロッパ(印欧)祖語」を復元します。各言語の中での歴史的展開は「音韻変化」という法則性を示します。音韻(音素)に関わる変化の法則性は「音韻法則」として確認されます。重要な法則は十九世紀中にほぼ確かめられていました。

印欧語比較言語学は上記のような各レヴェルにおける「音韻法則」を主な道具として、ことばを歴史的に説明します。各言語の姿は最古の時代から後の時代まで文献を精査して確認します。「比較」、「歴史的」、「文献学的」の三つが印欧語比較言語学の三本柱を構成します。